

戦後社会福祉と初期ケースワーカー「小林イツ」の軌跡

大塚 良一

1 はじめに

孝橋正一（1912—1999）は戦後の社会事業について「厚生行政はアメリカ社会事業の移植に権力的協力をを行い、多くの学究は、それをそのまま、あるいは翻案して、科学的『社会事業』と自称し、『社会福祉』学として打ち出してきた¹⁾」といっている。また、黒木利克（1913—1978）は「Welfare from U.S.A.」の中で「アメリカの社会事業には、われわれの学ぶべきものが数多いことは無論であるが、個人の尊厳を社会事業の基礎におくこと、人間性並びに科学的技術の研究とその応用、及び社会事業の経済学とはその最も大いなる特色と思う。とにかく虚心坦懐に社会事業における我々の長所はこれを残し、外国の美点はこれを取り入れ、われわれの欠点はこれを捨て去って先進国に劣らぬような、先進国に劣らぬものにしたいと願っている²⁾」といっている。

つまり戦後の社会福祉事業は、アメリカ社会事業と新たな日本の社会福祉文化の創造と模索の時代であったと考える。しかし、戦後の日本にはジェンダーや朝鮮人、障害者などに関する差別が多く存在していた。そこに、アメリカのソーシャルワークを移入するのは至難の業である。

その様な中で、国立東京第二病院【1951（昭和26）年～1953（昭和28）年】、整肢療護園【1953（昭和28）年～1974（昭和49）年】などでMSW、ケースワーカーを務め相談援助業務の先駆けとなったのが小林イツである。元医療法人真正会理事長で小林イツと日本社会事業専門学校（現：社会事業大学）で共に学んだ斎藤正男は「恐らく日本のMSWの草分けで、以来今日まで職場の変遷こそあれ、MSW一筋に活躍され、いかに多くのクライエントに光明を与えただろう³⁾」といっている。小林イツは英語教師という道を捨て、戦後の混乱期の中、手探りでメディカルケースワーカーというものを実践し多くのソーシャルワーカーに影響を与えた。

なお、本研究は元埼玉県職員の松原氏が残した小林イツとのインタビューテープ130本を基に作成したものである。小林イツのケースワーカーとしての人となりを考察していきたい。

2 戦後の社会事業と専門職

戦後の社会事業について孝橋正一は「『社会事業は理論ではなくて、愛と体験である』という観念が、近代的社会事業の創生期における日本の社会福祉事業の合言葉であった。この傾向性は現代日本の社会事業界まで引き継がれ、とりわけ現場実践の立場から『理論は役立たぬ』とか『理論家は現場を知らない』とかいう表現で、理論に対する不信と、理論の否定への志向が表明されている場合が多い——中略——一方、理論もまた実践への強い関心と意欲を指示し、自分の構想する社会事業体系がすぐれて実践的であることを顯示し、その著書の題名や副題に実践という文字を織り込んでいる場合さえ見られる。そして、そこに意味

されている実践の概念は、その体系の提示者の恣意的・主観的判断によるものが圧倒的に多い⁴⁾」といっている。これは戦後の社会事業が二つの体系から発展してきたことを意味している。一つは、行政を中心とした社会福祉法体系・制度、システムの構築である。これは前述の黒木などによるアメリカ社会事業行政の移植である。もう一つは宗教者・篤志家などによる社会福祉事業の展開である。賀川豊彦、糸賀一雄などの多くの実践者による活動は制度という枠を越えて、社会運動の形態をとり支援体制の確立を図った。

このような中で、制度の中で作られたソーシャルワーカーという言葉が一人歩きをすることになる。国や地方公共団体を動かす行政職の仕事の中で社会事業の位置は高いものではない。社会事業は資本主義社会の維持存続を前提とするもの⁵⁾であり、行政の中心課題は資本主義社会そのものの推進発展に主眼が置かれている。ここに社会事業の専門職の確立を困難にする要因が生じる。つまり、行政機構の中での人事異動は必然的に経験の蓄積を重視するソーシャルワーカーの育成を困難なものとした。いち早く神戸市で「社会福祉職員人事制度確立の基本構想試案」を提案した檜前敏彦は「実は日本の社会事業には社会事業従事者の職場はあっても、ソーシャルワーカーという、他の職業から明確に区分された固有のキャリア・サービス、一生一職としての職業領域は未成立である⁶⁾」とし、さらに「民生行政の主体である現業に配置されることが左遷、島流しと受け取られたり、長くいることが釘付けと感じられる状態では、社会福祉行政の近代化や専門化などはいくら言ってみても議論の空転に過ぎない⁷⁾」といっている。

これは社会事業行政という主軸の欠損であり、社会事業自体の発展やその方向性にも大きく影響を与えた。その一つが施設福祉政策である。戦後の社会事業は知的障害者福祉に代表されるように社会福祉施設の設立に主眼が置かれた。その最たるもののがコロニー政策である。アメリカでは1962（昭和37）年10月、ケネディ大統領の命によって設けられた大統領精神薄弱委員会は「精神薄弱対策の国家的活動についての建議」を発表した。この中に、施設保護の新しい形を作り出す方策として、診察、通園保護、両親指導を行う小さないきとどいた収容施設を各地域社会につくり、地域社会から遠く離れたところに設けられた、現在5千人からそれ以上も収容している大きな施設と入れ替える⁸⁾、というものであった。これらのことがなぜ行われたかの分析や社会的協議が行われないまま、日本では治療教育という名のもとにコロニー政策に突入していく。

これは児童福祉の分野でも同様である。里親制度を日本に紹介した日本女子大名誉教授の松本武子は「里親制度の実態について筆者が関心をもったのは、留学してアメリカの実態を知ったとき、すなわち昭和28年であるクリスマス休暇を迎えシカゴに行く機会を得たので『児童養護施設を見てきたいから紹介してください』と大学院長に頼みに行ったら『お前は、ルーズベルトのリコメンデーションを忘れたのか』と叱られてしまった⁹⁾」といっている。つまり、1909（明治42）年の第一回全米児童福祉会議の考え方を基本としていないのかということを問われたことになる。

さらに、松本は「アメリカの大学院で学んだケースワークの講義は、その原理ならびに技術の真髄が実習の場に自己を投入することによって確認されるのである。が、帰国してケースワークを講義する私は、単に講義のための講義に過ぎないという寂しさを感じた。ケースに結びつかないケースワークの講義などあり得ないのである」といっている¹⁰⁾。

このように戦後の社会事業教育は、本来その中心となる行政組織によるケースワーク実践

の場を適切に提供しない状況でソーシャルワーカーの育成を行ってきた。さらに、本来社会福祉の専門職が活躍する場である児童福祉司、知的障害者福祉司などの多くは基礎資格を社会福祉主事とする公務員（地方上級福祉職）としての採用である。これは、社会福祉士という福祉の専門職と呼ばれる資格ができて30年経過している現在でも同様である。

3 小林イツの功績と実践

小林イツは戦後の動乱期に社会事業を学び、国立東京第二病院 MSW、整肢療護園のケースワーカーとして、前例がない社会事業のソーシャルワーカーとして実践の中で、その仕事を開拓してきた人である。表1が小林の足跡である。戦前、戦後にかけて女性の相談支援分野における職業人としても先駆者に入ると考える。彼女は学んだ「英語」を武器に教職の道から、GHQの通訳、現社会事業大学での教育、WHOのアメリカ研修を体験し、メデカルケースワーカーとしての実践を行った。エピソードでは、小林の人となりが分かるよう私的なことをあえて入れていることをご容赦願いたい。

表1 「小林イツ」の足跡

年 代	内 容
1913（大正2）年 11月9日	出生。秋田県本荘市で生まれる。
1930（昭和5）年 4月から1934（昭和9）年3月までの4年間寄宿舎で過ごす。 (17歳～21歳)	<ul style="list-style-type: none"> ・活水女子専門学校英文科時代（現：活水女子大学 長崎市東山手町1-50）。[エピソード] ・私自身教科として体育と数学ができなかった。入試科目に数学があることはダメだった。兄が長崎にいる時に活水を紹介してくれた。活水は英語と国語だけだったから受かったと思う。記憶力・暗記力については普通の人より良かった。そのため、英語は記憶力が中心なので楽だったけど面白くはなかった。 ・寄宿舎で2人部屋だった。勉強をした。日曜日、礼拝があるが勉強したかった。1年が経ったらかなり良い成績が取れるようになった。 ・人に尽くすということを知らず、知らず入っていった。Sさんに目を開かされた。 ・活水でキリスト教に入った。卒業してから住友で226事件の時に住友を辞めた。 ・アメリカで当時の校長のミスホワイトにあった。地久節（ちきゅうせつ）というものがあった。（2007.1.7～9月までの録音）
1936（昭和11）年 4月から1947（昭和18）年 (23歳～30歳)	<p>弘前女学校 英語教師 ※1946（昭和21）年校名を弘前聖愛高等女学校と改称。校長ミスカルテル。 [エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・秩父宮殿下が弘前の連隊長であった。弘前女学校では村中清吉先生と出会っている。また、校長はミスカルテスであり、当時、秩父宮殿下に女学校の学芸会を御覧に入れるということがあった。英語劇を御覧にいれた。 ・昭和19年にアメリカ人の先生は教育と宣教という2つの使命があった。アメリカの本部から引き上げのことになった。家政科のM先生から東京に行くのならS校長を知っているとのお話があり、昭和15年に東京に出た。 ・しかし、直ぐには教員の口はなく、新聞でバイトを探した。電気通信工学（現東海大学短期大学部電気通信工学科 高輪校舎）でのアルバイトのため、

	<p>高輪に行って検査の道具が置いてあったところで面接を行った。採用にはなったが1年もいなかった。その時に、日本女子大の国文科を出たSさんと出会った。</p> <ul style="list-style-type: none"> この時は文京区目白台に間借りしていた。Sさんとドイツ語を学んでいた。入職はしたが入ってすぐに赤痢になった。健康保険がない時代で有り金を全部。豊島病院に連れて行かれた。菌は出ていなかった。しかし、食べさせないという治療法を行った。直って帰ったら最中を10個ほどペロッと食べてしまった。 電気通信工学科に出勤したら弟は戦死、母が50歳で、脳出血で死亡する。そのたびに秋田の家に帰る。ろくろく仕事をしないのに校長に挨拶し、成女に移動した。しかし、退職の当日、昇給されていた。その日も風邪で休んでしまい、申し訳ないという気持ちで一杯であった。(2007.1.17録音)
1943（昭和18）年 3月 (30歳)	<p>イエス団保育園 ※賀川豊彦に師事。イエス団保育園就職。6か月間で挫折。 [エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> 神戸で一生過ごすつもりであった。T先生から本を贈ってくれた。賀川先生のところは本当に大変な生活であった。保育園は周辺地区住民のトイレ替わりであった。花を植えても野菜を植えてもとられてしまう。とんでもないところに来たと思った。 賀川先生のところに行く前に興望館に行った。そこに行こうと思ったが、結局は賀川先生のところに行くことを決めた。(2004.10.7録音) 賀川先生のところでは妨害する人も大勢いる。石を投げる人もたくさんいた。皮膚病にもなる。心のなかの考えが甘い、そんなことで逃げ腰になった。心の内側から責められる気持ちがあった。賀川先生から信仰が足りないと言われたが、続けることができなかった。(2007.1.22録音) 救世軍の山室民子さんに会う。 「あなた自分のやっていることに何も意味がないといっているが、そんな気持ち（人を助けるために尽くすこと）では今の日本では殺されている。支那ではそういう気持ちのある人を求めている。しかし、結婚とかは考えられない」気持ちがしっかりしていない、ふらついでしまったことを見透かされたと思った。(2010.3.10録音)
1943（昭和18）年 から1946（昭和21） 年3月	<p>成女学校（東京都新宿区富久町7-30） 英語教師 [エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> 東京に戻ったら成女の校長から「いった通りだろう」といわれた。10月ごろTさんが訪ねて来てくれた(2010.11.10録音)。
1947（昭和22）年 4月から1950（昭和25）年まで (34歳～37歳)	<ul style="list-style-type: none"> GHQ 翻訳・通訳の仕事に就く。 [エピソード] 翻訳の仕事があるから来ないとと言われる。PHW 厚生省だった。翻訳の仕事は5、6人であり、日本語を英語に訳すグループであった。 あるときアメリカ人が通訳してくれないかといってきた。まだ入って1週間か2週間であった。医療といわれて「メディシン」といっただけであがってしまった。当時福祉課があり大橋たねさんが福祉課で働いていた。 35歳の時、福祉課の大畑先生から勉強をして<u>職業として社会福祉の仕事を選んでみてはどうか</u>と言われ、日本社会事業専門学校（現；社会事業大学）を紹介された。この時、新宿の映画館で賀川豊彦の映画をみて、涙した。今の日本は弱いものを切り捨てていると強く感じた。

1951（昭和26）年 (38歳～39歳)	<p>学校法人日本社会事業専門学校（研究科）在籍（鉄道弘済会の奨学金）</p> <p>※1947（昭和22）年日本社会事業専門学校設置、本科（3年制）、研究科（1年制）を置く。</p> <p>[エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当時の厚生省社会局更生課長松本征二氏に就職先のことで相談に行ったら整枝療護園を紹介されたが、戦後すぐのため現状では就職は叶わなかった。
1951（昭和26）年 から1953（昭和28） 年1月 (38歳～40歳)	<p>国立東京第二病院 MSW（現独立行政法人国立病院機構東京医療センター 東京都目黒区東が丘二丁目5番1号）</p> <p>[エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戦前の海軍病院600人の入院患者と外来患者を持っていた。最初のソーシャルワーカーとなる。 ・GHQ命令でソーシャルワーカーのおかれていたA級の保健所以外は、国立病院、療養所、民間の総合病院、精神病院などにはばつり配置されていた程度であり、<u>専門の教育を受けているソーシャルワーカーは極めて少数であり、正に草分けの時代であった。</u> <p>※椎名町のアパートで生活。</p>
1953（昭和28）年 1月末 (39歳)	<p>WHOの研修生としてアメリカで研修。</p> <p>※ワシントンで7か月間、ホームステイを行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昭和31年6月 厚生省の中尾仁一先生が、私が行った後に6か月間のアメリカ研修を行った。中尾保健所課長から保健衛生の適当なアドバイザーはいないかとの相談があった。ベックマンさんを紹介した。昭和31年6月、ベックマンさんは全国の保健所を回った。部署が違ったのでベックマンさんの直接の指導を受けることができなかった（2004.10.8録音）
1953（昭和28）年 から1974（昭和49） 年 (40歳～61歳)	<p>整枝療護園 MSW（心身障害児総合医療療育センター 東京都板橋区小茂根1-1-10）</p> <p>[エピソード]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・整枝療護園でもケースワーカーは初めてであり、ワーカーは一人、入園した児童は100名程度だった。 ・私なんか甘ちょろいと思った。療護園の子どもたちはあれだけの障害を背負って生きている。 ・子どもの方は児童指導員が対処していた。療護園は整形の方だが、間接結核の病棟があった。養護学校も全国にいくつもなかった。よくそれを乗り越えて希望を無くさないで年老いていったとしみじみ思った。また、<u>子どもたちからどれだけ教えて頂けたか分からぬ</u>。年を重ねることで若い時に分からぬものが見えてくる。 ・療護園で出会ったTさん看護婦でアメリカに渡る。30年間アメリカにいる。婦長にはならないと言っていた。アメリカの制度の違いがある。しかし、何度も園を訪ねて来てくれている。（真寿園入所後） ・<u>ケースの底を流れる本当の事を書いてみるのが良い</u>と言われた、私自身は書くことはできなかったが実践したいと思った。 ・友人が昭和30年11月、聖路加病院に入院した。友人には全身痛みがあった。友人と行きたいと思いウィンフィルの券を買った。しかし、その時には癌が全身に廻っていた。長くいたいと思ったが、それが最後昭和31年2月1日に亡くなった。聖路加から連絡がきた。26歳から46歳までの間だがずい分影響を受けた方だった。山形県の鶴岡出身。倒産して札幌に行った。電気通信技師だが独学だった。知らない間に自分が教育を受けているということで慢心があったことに気づかされた。（2004.11.10録音）

1975（昭和50）年 3月から1987（昭和62）年3月 (62歳～74歳)	<p>霞ヶ関中央病院 MSW 〔エピソード〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当初は、私立の病院と国立の病院が違うことが分からなかったため苦労した。 ・当時は定年制がなかったため、74歳で辞める決心をした。その後、石垣島に行く。本島より離島の方が自然のままである。人情も残っていた。10年間過ごす。離島、小屋から100歩で海に着く。いつでも行きたいと思う時にいけた。（昭和52年、真樹園のケースワーカーとしてKさんが務めた）
2009（平成21）年1月6日（96歳）	<ul style="list-style-type: none"> ・真寿園入居（Kさんと共に） <p>※松原氏のインタビューは2004年7月から2009年8月27日までの5年間、約130本のテープが残されている。松原氏と小林イツさんは現在の社会事業大学の先輩と後輩ということもあり、社会事業大学名誉教授の五味百合子先生（戦前社会事業研究生第8期・1936年卒業）の話題等個人的な友人関係の話題がインタビューでは多くなっている。</p>

小林いつの実践としては、1989（平成元）年1月に発行された『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』の中で紹介されている事例からみていく。松原氏のインタビューテープの中にもいくつかの体験や事例が紹介はされているが、個人情報の抵触が危惧されるため、敢えて自身の著書の体験・事例からケースワーカーとしての視点を読み解くことにした。

【experience 1】 国立東京第二病院 MSW として最初の姿勢

問題は傷い軍人であり、国の犠牲者であるこの人たちに病状安定、症状固定の状態になっているからと言って退院を強いることなど出来るわけはないが、そうとか言って、いつまでも病院を我が家にしてよいとも言えず、困りはてているというのが当時の病院の実情であった。だから「今度病院で医療社会事業とかいう役目の人を入れたというが、俺たちを退院させようという魂胆なんだろう。追い出してみろ、病院に火をつけてやる」と意気まいしている患者さんもいると聞かされた時は本当に怖いと思った。それでも庶務課長や訓練病棟の担当医に励まされながら患者さん達と個別に、時にはグループで話し合うことを始めた。まず、この人達の話を聞くことだと、訴えるところを一生懸命に聴くことに集中した。障害は上下肢の切断や硬直が主で、失明者も2、3人入院していた。本人たち自身の生活歴、家族背景、障害の受け止め方などに耳を傾けたのだが、私自身どうしたら手助けができるのか、よい考えも浮かばず、溜息の出ることばかりであった。けれどもだんだん、1人、2人と気持ちを開いて自分の方から相談に来てくれるようになった。

福祉事務所の生活保護や身障担当のケースワーカー達との相互理解も良く、心を割ってAさんの問題、Bさんの悩みについて話し合い、打開策を進めていたのは幸いであった。また、職安は社会更生に欠くことのできない大切な資源であり担当者との連絡も頻繁に行われた。問題の壁にぶつかって立往生の時には、母校社会事業大学のN先生や立教大学のO先生たちにSOSをだして駆けつけアドバイスを受けていた。必ずしも具体的な答えが出たわけではなくても、そんな時は話を聞いてもらったことではっとし、もやもやが晴れて新たに考えることができた。これはワーカー対クライエント関係と同じことだと実感し、また先生方に感謝したことでもあった。

出所：小林イツ著『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』医療法人真正会発行1989年.15～16頁。下線筆者。

experience 1 は国立東京第二病院 MSW としての最初の仕事である。社会福祉の現場では、最初にケースの問題点や困難さが語られ困惑することが多い。しかし、実際に接してみると、その人の抱えている問題の難しさでることに気づく。最初からスーパービジョンについての視点を持ってケースワークを行っており、社会資源との友好な関係を築いている。

【experience 2】アメリカでの研修で学んだこと

1週間から2週間単位で一つの病院や施設でスーパーバイザーの指導を受け、実際、ワーカーはどんなサービスをどのように行っているのかある程度理解できた。実習の方法は、現在社会事業専攻の大学生が受けているのと同じようなものであったが、英語が多少わかっているとは言ってもハンディになっているので把握不十分な面が多くあったと思う。印象に残っていることを少し述べてみると、全体的に言えることは、どこの実習の場面でもスーパーバイザーはやさしく暖かく接してくれたし、週末の休日にはスーパーバイザーの自宅に招待され、食事を共にし、歓談の一時を持ったこともしばしばあった。記録を読ませてもらうことも多かったが、ワーカーにはステノタイピストのクラークがついており、速記され、タイプされたものが自分の目の前にある記録なのだと知り、その規模の相違、その進んだやり方に驚嘆させられた。

出所：小林イツ著『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』医療法人真正会発行1989年.24～25頁。

experience 2 はアメリカでの研修での記録からである。メディカルソーシャルワーカーの地位がアメリカで確立していること。さらに、スーパービジョンの体制がケースワークでは極めて重要な位置を占めていることが理解できる。

小林イツの『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』の中では、整肢療護園での事例が2事例、霞ヶ関中央病院での事例が5事例紹介されている。どれも小林イツのケースワーカーとしての力量がうかがわれるものであるが、その中で、整肢療護園の事例を紹介する。

【事例】脳性まひ児K君

私が療護園に就職した当時K君は10才くらいであったろうか。九州K県の養護施設（現：児童養護施設）から昭和24年に遺棄児童で障害を持っているとの理由でK県から措置されてきたのだと聞いた。杖についてよたよた歩くがたびたび転倒する。上肢にも障害があるのでADL（日常生活動作）も部分介助を要したが、言語の方は聞き取りがたいが意思疎通は可能であった。知的能力には特に問題はなく、文字も書けたし話も良くしてくれる子供であった。早くから入園しており、孤児同様の子供ということで、園長を始め職員のK君への関心は高く園内に知れわたっている子供であった。

K君の話によると、その生い立ちは「朝鮮で両親や弟と4人で暮らしていた。父親は死亡、母親は看護婦であった。戦後朝鮮からK県に引き揚げてきて、どこかの旅館で親子3人寝泊まりをしていました。ある日母親が弟を背負って外出したまま帰ってこなかった。それから誰かが来て施設に入れられた。しばらくしてから東京の療護園に連れてこられた」ということで、記憶もはっきりしていたし話の筋も通っていた。なんとか母親を探し出して親子共々生活できるようにしてあげられないものかと、九州の児童相談所と再三連絡を取り、戸籍を調べてやっと母親の氏名が見つかった。戸籍謄本の中から近親者らしい人を探して手紙を出してみた。その当人はすでに死亡していたが、こちらの手紙は廻り廻って母親の義理の妹らしい人の手に届いたことが判った。その時は職員の方も嬉しくてK君共々興奮の歓声を上げたのだった。――中略―― 事実はK君の話の通りであった。母親はS市の乳児院の看護師で、施設内の一室に次男と2人で暮らしている。K君を置き去りにしたわけでは決してない。次男を背負って仕事を探しに出かけたが、途中で急病になり直ぐに帰宅できなくなり、2、3日後戻ってみたがK君の姿はなく、探してみたが消息は判らなかった。――中略―― 中学3年生のとき、母と子の対面が実現された。次男も共に遠い南のS市から上京し、何年かぶりかの母と子の対面であった。進路については「中学卒業と同時に身体障害者訓練校に入所し、機械編の技術を習得した後S市の母親の許で生活する」と相談がまとまり、K君はこの目標に向かって努力した。

出所：小林イツ著『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』医療法人真正会発行1989年.34～36頁。

小松源助（1927—2006）は「社会福祉実践は人と環境とが相互作用する「共有領域」（interfaace）に焦点を置いて両者の「適合」（pearson-enviroment fit）はかっていくところに独自性を主張してきているが、その独自性を開発していく上で社会的支援ネットワーク・アプローチは重要な貢献をしていくものとみることができる¹¹⁾」といっている。小林の一つの事例の中にも多くの社会的支援の体制がつくられ、長い時間にわたっての支援構築がなされていることが分かる。

4 おわりに

戦後のケースワークについて小松源助は「たとえば、岡本は内外の膨大な文献目録を基にケースワーク研究の発達過程について体系的な考察を試みているが、その総括として、『ケースワークは、ごく最近までその視点を社会におくか個人におくか、あるいは環境か心理かの両極のホールを右往左往してきたといつても過言でない。そして、つねに両者を統一的にとらえ、操作的に活用できる概念を模索し続けてきたといえる』と指摘しながらも、『社会と個人を結ぶ役割概念の導入』だけに限定し、そして、『ケースワークが個人に重点をかけるか、社会的側面を重視するかという二者択一のとらえ方を凌駕して、両者をダイナミックにかつ統合的にとらえる概念として重要な課題となってくる』と言及するにとどまっている。そのため、ケースワーク論として展開される内容は、それまでの『枠組』にたった旧態依然のままのものになっている¹²⁾』といっている。

すこし、違う視点から支援関係についてみると上野千鶴子は理想の介護について「理想の介護には答えもマニュアルもない。『どうしてほしいかは、当事者に聞いてほしい』——これしか答えはない。当事者が100人いれば100通り、ひとりの当事者でもそのときどきの状況に応じて千変万化するだろう。つまり、ケアとは対人関係そのものなのだ。そしてこのことは、何度も強調してもしすぎることはない¹³⁾」といっている。ケースワークも同様のことがいえる。対人関係そのものがケースワークであり、実践研究の中にこそケースワークの理論が作られるのではないかと考える。

小林イツが実践したケースワークと、そのスーパービジョンの関係の中に、多くの価値ある理論と技法が詰まっている。このような戦後日本の社会事業推進の中で行われた、多くの実践に対して、丁寧な検証と体系づけが行わなかったことが悔やまれてならない。

引用文献

- 1) 孝橋正一 「現代社会事業理論の基本的課題」 吉田久一編 『戦後社会福祉の展開』 1976年 16頁。
- 2) 黒木利克 『Welfare from U.S.A.』 日本社会事業協会 1925年 5頁。
- 3) 小林イツ著 『社会福祉事業と私 人生一出会いと転機』 医療法人真正会発行 1989年 2頁。
- 4) 前掲1. pp19~20。
- 5) 前掲1. p17。
- 6) 檜前敏彦 「ソーシャルレースワーカーの養成と研修——その基本的・実践的问题点と対策——」 1996年 13頁。
- 7) 前掲6. p27。
- 8) 全日本特殊教育研究連名、日本精神薄弱者愛護協会、全日本精神薄弱者育成会編 『精神薄弱者問題白書 1965年度版』 日本文化科学社 1965年 34頁。

- 9) 松本武子 『里親制度の実証的研究』 建帛社 1991年 3頁。
- 10) 前掲9. p4。
- 11) 小松源助 「社会福祉実践における社会的支援ネットワーク・アプローチの展開」 日本社会事業大学編 『社会福祉の現代的展開』 勁草書房 1986年 239頁。
- 12) 小松源助 「ケースワークの理論的基盤をめぐる回顧と展望」 吉田久一編 『戦後社会福祉の展開』 1976年 82頁。
- 13) 上野千鶴子 『ケアの社会学 当事者主権の福祉社会へ』 太田出版 2011年 215頁。